鎌倉・鶴岡八幡宮の節分祭

年男・年女が威勢よく豆まき

2月3日、日曜日で多くの参拝者が訪れる中、毎年恒例の節分祭が神奈川県鎌倉市の鶴岡八幡宮（吉田茂穂宮司）で斎行された。

午後一時、太鼓が打ち鳴らされ大紋衣装の年男と年女が本殿を埋め尽くす中、修祓を終えた宮司・祭員が本殿へ参進。宮司一拝、献饌の儀に続き祝詞を奏上した。続いて八幡大神様の力を頒け与える金幣神事を執り行った。玉串拝礼に移り宮司に続き氏子総代、その他の参列者が玉串を奉って拝礼した。撤饌の儀の後、鳴弦の儀で使用する弓二張と矢数本が執行する二人の神職に手渡された。次に宮司一拝して御本殿での祭儀は滞りなく修められた。年男・年女は本殿から大石段を下りて、舞殿へ向かった。事前に配布された整理券をもらって待っていた参拝者が舞殿を囲んで豆撒きを待っている中、豆撒きに先立ち、鳴弦の儀が行われ、二名の神職は東西南北の四方に向かい弦を強く引いて一気に放ち、空気を震わせ災いをもたらす邪気を祓った。その後太鼓の合図で「福は内」と大声を掛けながら年男・年女たちが豆を求める人に勢いよく福豆（豆の入った袋）を撒いた。参列者はこの福豆を家に持ち帰り、豆を撒いて福を呼び災いを祓う。繰り返すこと数回。福豆の一部には「当たり」付きもあり、舞殿周辺は大きな歓声で盛り上がった。いくつかキャッチした人もいれば、わずかしか取れなかった人もいた。当たりの福豆を手にした参列者は交換所で福物（縁起物などの詰め合わせ）と交換した。

1月4日から2月5日まで鶴岡八幡宮の境内にある、鎌倉国宝館で源実朝没後800年・鎌倉市制施行80年記念「源実朝とその時代」特別展が開かれた。今年は建保7年（1219）1月27日に源実朝が鶴岡八幡宮で非業の死を遂げてから800年の節目に当たる。源実朝は建久3年（1182）に源頼朝と北条政子の次男として生まれた。建仁3年（1203）、弱冠12歳で従五位下征夷大将軍に任命され、第3代将軍に就任した。就任当初は、北条時政（祖父）や北条政子（母）の補佐・後見を受けていたが、徐々に主体的に幕政に関与していった。また京へのあこがれから、京都の貴族文化や文学を愛し、坊門信清の娘を妻とするなど京との関係を重視した。武士としては初めて朝廷から右大臣に任命されている。早くから作歌に親しみ、家臣を通じて藤原定家の指導を受けるなど歌人としても天性の才能を見せている。

特別展では実朝・政子親子に栄西が捧げた「喫茶養生記」（重要文化財・寿福寺蔵）や「明庵栄西坐像（重要文化財・寿福寺蔵）など実朝ゆかりのものが展示され、源頼朝、北条政子と実朝との親子の情など当時の様子を忍ぶことが出来る内容だった。

鶴岡八幡宮の節分祭＝2月3日、鎌倉市

川崎大師の節分会＝2月3日、川崎市

川崎大師で節分会

3万袋の福豆が参詣者に

厄除弘法大師を本尊とする神奈川県川崎市の大本山川崎大師（真言宗智山派金剛山金乗院平間寺、藤田隆乗貫首）で二月三日、節分会が厳かに盛大に執り行われ、「除災招福・開運満足・家内安全」の祈願の後、午前11時半、午後2時、午後4時半の三回にわたって藤田貫首はじめ福男・福女により、約1トン3万袋の福豆が撒かれた。

本堂を満たした袴姿の年男・年女と共に大護摩供の祈願者が合掌する中、大導師、式衆が入堂、本尊厄除弘法大師に拝礼、着座。参列者に向かい加持を授け、三帰依文が奉唱され読経に入り、「除災招福・開運満足・家内安全」を祈る表白が奉読された。太鼓が鳴り響き、般若心経が読誦される中、大導師により願い主の願意が込められた護摩供が奉修された。

「除災招福・開運満足・家内安全」の祈願の後に、大導師、年男・年女たちが薬師殿特設舞台に勢揃い。太鼓の合図で一斉に「福は内」「福は内」と連呼。多くの参詣者から歓声が上がった。

福豆を手にした人は嬉しそうに満面の笑みを浮かべていた。高齢者や幼児の為の特別コーナーが設けられ、職員から福豆を別途に手渡された。川崎大師では「聖域には鬼は存在しない」との理由で「鬼は外」とは言わない。この日は子供たちを連れた家族連れが多く訪れ、延べ一万二千人が参詣し、厄除弘法大師の功徳にあずかった。

20年来毎年来ていると言う女性は「ここに来ることを楽しみにしている。今日は、豆まきに三回とも参加した。豆を受け取ることが出来てうれしい」と述べ、タイから来たという男性は「どんな意味があるのか知らないが、日本の伝統的な行事に参加できてとても満足している」と話していた。

神田明神で豆まき式

新築文化交流館も賑わう

江戸総鎮守として尊崇され祭礼の神田祭が江戸三大祭りの一つである神田明神（正式名称は神田神社＝大鳥居信史宮司）で2月3日、恒例の節分祭豆まき式が行われた。

午後2時、江戸消防記念会の鳶頭による木遣りの声も高らかに、赤鬼・青鬼をはじめ、だいこく様・えびす様、雅楽を奏でる楽人、古式装束の神職に続き、氏子総代、特別崇敬者墓年男代表が境内を参進し、御神殿での神事に臨んだ。

神事の後、御神殿前で千代田・中央区長や神田警察署長、神田税務署長らによりくす玉割りが行われ、「家内安全」「交通安全」「確定申告はお早めに」などの垂れ幕が出てきた。次いで、古代の武人の装束を着用した神職により、表鬼門・裏鬼門の方角に向けて矢を放って邪気を払い多幸を願う儀式「鳴弦の儀」が、「え～い！」の掛け声をかけながら行われた。

豆まきは境内に設けられた特設ステージの上からで、アイドルの「放課後プリンセス」や元光GENJIの山本淳一などのタレントが登場すると、境内は最高潮に盛り上がった。また地元の政治家や博物学者の荒俣宏氏、JALの女性副操縦士やキャビンアテンダントらも、「福は内、鬼は外」の発声に合わせ、昨年暮れに完成したばかりの文化交流館に向かい豆をまいていた。

神田明神は毎年AKBグループの成人式が行われることから「アイドルの聖地」として知られている。境内には、「銭形平次の碑」や「国学発祥の碑」などあり、江戸の歴史を感じさせる。珍しいのは、信州生まれの2歳のポニー「神馬・神幸号（あかりくん）」が愛嬌を振りまいていること。神馬像はよくあるが、実際に馬を飼っている神社は少ない。

昨年12月15日、神田明神創建1300年を機にオープンした文化交流館「EDOCCO」は、1階が神札授与所、物販・飲食、2～3階が多目的ホール、4階が貴賓室、地下1階が日本文化体験スペースの5フロアで構成されている。「伝統×革新」をコンセプトに、伝統の継承だけでなく、新しい文化を創出する交流の場として、参拝者、観光客、訪日外国人など多様な人々が集まる場所にするのが目的という。

和モダンのホールでは、各種式典のほか、ジャパンカルチャーの発信地としてライブ・コンサートなども行う。1階のカフェでは女性向けのスイーツが好評で、売店では御払い済みの五円玉が付く「神社声援（ジンジャーエール）」も売られていた。地下1階のスタジオでは着物の着付け、古典芸能の落語やお座敷芸なども体験でき、江戸の「粋」を感じられる仕組み。各フロアにはアート作品が展示され来館者の目を楽しませていた。もっと日本を知りたい外国人に人気を博しそうである。

神田明神の豆まき

オープンした文化交流館

第11回埼佛仏教文化講座

お香の歴史と効能

さいたま市

2月12日、埼玉県さいたま市の埼佛会館で、埼玉県佛教会主催の第11回埼佛仏教文化講座が開かれた。最初に倉持秀裕会長が挨拶し、講師の市毛和佳奈氏（「和の香り」創香師、アロマコーディネーター）が「お香の歴史と効能」という題で講演した。次に参加者が「にほひ袋創り」の実技、八種類の香料を調合して自分の好みの香りを調合して「にほひ袋」を作った。

市毛和佳奈氏の講演の要旨は次の通り。

香りを作る原料は、沈香（じんこう）、伽羅（きゃら）、白檀（びゃくだん）の三大香木。沈香は天から贈られた木と言われ、木の傷に樹脂が入り込んで香りを作る。伽羅も沈香と同じ過程で作られ、白檀は元の木自体が良い香りを出す。古代インドでは宗教儀式に欠かせないもので、釈迦も好んでいた。白檀も良い香りを出すまでに50年から100年かかる。匂いは「嗅ぐ」だが、香りは「聞く」という。三大香木の他に、漢方薬の原料やスパイスなども原料になる。

香の歴史は約1500年前に始まり、飛鳥時代の538年、仏教と共に香木が伝来した。595年、2メートルほどの流木が淡路島で見つかり、火をつけたら、とても良い香りがして島全体に漂ったので朝廷に献上したという話が残っている。献上された流木を見て聖徳太子は「沈香だ」と言ったという。今でも淡路市の枯木神社には香木が御神体として祀られている。また、同市の伊弉諾神宮には香りの石碑があり、聖徳太子の言葉も記されている。

奈良時代の753年に中国から鑑真和上が来日した。鑑真は医学の知識が豊富で、お香の原料や調合技術を日本にもたらしたと言われている。当時は、お香は主に神前、仏前だけに使うもので、焼香の材料や体に塗って身を清めるために使った。平安時代に入ると華やかな香文化が芽生え、貴族たちは自ら調合したお香を部屋にくぐらせ、服につけるのを身だしなみとした。

鎌倉、室町時代に入ると武士が台頭し、禅が広まった。鎌倉時代の武士たちは香木そのものに惹かれ、愛し、兜や鎧に香を焚き染めた。室町時代の一休は「香の十徳」を広めている。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康は香木の蒐集家でもあった。江戸時代に入ると、香は町人にも広がり、におい袋が大流行し、中国からお線香の技術が入ってきた。

明治維新によって古い文化は排除され、香道はすたれ、香料の需要は激減し、香りの文化は衰退の危機を迎えた。しかし、皮肉にも西洋人によって再び日本に香り文化がもたらされ、和の香りとして香文化は復活した。

香木を愛した釈迦は白檀が大好きで、涅槃図にも香袋が描かれている。釈迦が亡くなった時にインド中から香木を集め、白檀で火葬されたという。庶民も釈迦と同じように白檀で火葬されることを願ったが、白檀は高価なので買うことができない。そこで親戚がお金を持ち寄ったのが香典の始まりとされる。火葬の後、釈迦の骨から白檀の香りがしたと言われ、私たちは線香を焚いて、釈迦と先祖の懸け橋としている。

次に実技に移り、講師の指導を受けながら参加者がそれぞれの個性で調合し、各自の「にほひ袋」を作った。深谷雅良専務理事の謝辞の後、閉会した。

講演する創香師の市毛和佳奈氏＝2月12日、さいたま市の埼佛会館

春節で賑わう横浜中華街

華やかに祝舞パレード

横浜市

春節を祝う横浜中華街で2月16日、祝舞遊行（ゆうこう）のパレードが行われた。関帝廟通りにある山下町公園に集まった皇帝衣装隊など祝舞の一行は午後4時、大勢の観衆が見守る中スタートし、関帝廟通りを練り歩きながら獅子舞、龍舞など披露した。沿道には子供たちを連れた家族やカップルが見られ、年配者や外国人観光客でにぎわった。

一行は関帝廟通りを抜けると、持入門を通って福建路へ進み、西門通りを抜けて長安道に入り、そこの大きなスペースで様々なパフォーマンスを見せ、観衆を大喜びさせた。その後、善隣門から中華街大通りに入り、南門シルクロードへ。そして天長門から再び関帝廟通りを経てスタートの山下町に戻った。

アメリカから来たという女性は「ここに来れてうれしい。綺麗な服を着た上品な女性たちが本当に良かった。踊りも素敵だった」と感想を述べ、スウェーデンから来た夫婦は「このような祭りは初めて見た。日本に来て本当に良かった。今日は思い出に残る日だ」と喜んでいた。

横浜中華街の春節は、中国で旧正月を盛大に祝う風習から来たもの。横浜中華街でも中国と同様に「春節」を1986年から祝うようになり、今年で33回目。中華街では昨年11月1日から今年2月28日まで中華街全域の春節燈花として、イルミネーションや提灯の灯で中華街の街並みを演出し、春節を迎える2月5日の前夜には、横濱関帝廟と横濱媽祖廟でカウントダウンが行われた。

2月5日には爆竹や太鼓が鳴り響く中、獅子舞「採青」（つぁいちん）が行われ、9日から17日にかけて山下町公園で春節娯楽表演が開かれ、龍舞、獅子舞、古箏演奏、中国舞踊、中国雑技などが披露された。最後に元宵節燈籠祭では、メッセージ燈籠に書き込まれた各自の願いが天に届くように奉納舞が行われ、獅子舞も披露された。

古代中国では年末年初に臘祭で先祖や衆神への祭祀が行われ、合わせて豊作の祈念が行われていたのが春節の由来。清滅亡後に成立した中華民国ではグレゴリオ暦が採用され、1949年の中国人民政治協商会議第一次全体会議で、新暦の1月1日を「元日」、旧暦の正月を「春節」とすることが決定され現在に至っている。

アジアの他の多くの国でも春節は国の休日になっている。朝の起床後、家族は年配者に長寿を祝う言葉を述べ、その後、近所の人たちや知人と春節を祝う言葉を述べ合い、子供には赤い袋に入ったお年玉（圧歳銭）を渡す習慣がある。春節では家族の団欒が重んじられ、新年に幸福がもたらされるよう春節用の衣装を用意し、新年の華やかさが演出される。

祝舞遊行の行列＝2月16日、神奈川県横浜市の横浜中華街

2・8独立宣言100周年記念式典

独立の精神を日韓の未来に

在日本韓国YMCA

1919年に日本の植民地統治下の朝鮮で起きた「3・1独立運動」の導火線となった朝鮮人東京留学生による同年2月8日の「2・8独立宣言」の宣布から100周年を迎えた同日、東京都千代田区の在日本韓国YMCA（李清吉理事長、朱宰亨総務）で2・8独立宣言100周年記念式典が開催された。在日本韓国YMCAは、1906年に朝鮮人留学生のために設立され、日本と韓国の懸け橋として様々な活動を行っている。

式典は、東京韓国学校PTAオモニ合唱団の「2・8独立宣言の歌」の合唱の後、在日本韓国YMCA理事長・李清吉氏の開会の辞で幕を開けた。続いて、韓国・国家報勲処長の皮宇鎮（ピ・ウジン）氏が韓国政府を代表して記念の辞を述べ、「2・8独立宣言を行った青年たちの事を思うと胸が熱くなる。ここから3・1独立運動が出発した。100年経った今も彼らの犠牲を忘れず、記憶しなければならない。我々は希望のある未来を築き、韓半島の統一も周りの国と連携して成し遂げたい」と話した。

2・8独立宣言100周年記念事業委員会の李鍾柔委員長（韓国国会議員）は「日本で勉強していた若い学生たちがこの場で大韓民国の独立宣言を書いた。独立と民主主義のために、朝鮮民族のために世界の良心に訴えた。その精神が大韓民国独立の動機になった。2・8宣言を記憶し、我々はその精神を受け継ぎ、良き未来に向かって前進しなければならない。南北統一、北東アジアの平和のためにも韓国と日本の関係が一番重要で、今日は両国の新しい未来を築いていくいい機会だ」と述べた。

記念の辞の後に、ソウルYMCA金仁福理事長の聖書拝読、在日大韓基督教会総会長・金鐘賢牧師の祈祷と続き、在日韓国留学生連合会会長の朴淳圭氏が2・8独立宣言書を朗読した。次に同事業推進委員会韓完相委員長、駐日韓国大使館の李洙勲特命全権大使、光復会・羅重華副会長、在日韓国民団中央本部・呂健一団長が祝辞を述べた。

東京韓国学校PTAオモニ合唱団による「故郷の春」、東京韓国学校合唱団による「タンゴアリラン」、両合唱団合同による「先駆者・希望の国へ」が披露され、最後にソウルYMCA名誉理事長の表用垠元老牧師による祝祷、そして万歳三唱で幕を閉じた。

東京が大雪に見舞われた大正8年（1919）2月8日朝、朝鮮人留学生の中心メンバーが集まり、日本語と英語に訳された独立宣言文、決議文、民族大会請願書を貴族院、衆議院議員、政府要人、各国駐日大使、内外言論機関宛に郵送した。同日午後2時、在日本東京朝鮮YMCA（現在日本韓国YMCA）の講堂で「朝鮮留学生学友会総会」を開き、「朝鮮青年独立団」を結成し、独立団代表11名の署名入り独立宣言文が満場一致で採択された。その直後、警察官たちが指導メンバー1を一斉検挙し、代表9名が逮捕された。

この事件は、日本国内はもとより海外でも報道され大きな波紋を呼んだ。逮捕を免れた学生たちは朝鮮に戻り3・1独立運動の展開に積極的な役割を果たした。2・8独立宣言で逮捕された学生に同情と理解を示した日本人弁護士は熱心に弁護するなど困難な中でも日韓共生の流れがあった。その後もクリスチャン吉野作造、内村鑑三らが金貞植、白南薫ら歴代の総務との間に信頼関係を結ぶなど、日本人と朝鮮人との交流が続いた。現在は在日本韓国YMCA内に「2・8独立宣言記念資料室」が開設されている。

記念の辞を述べる韓国・国家報勲処長の皮宇鎮氏＝2月8日、東京都千代田区の在日本韓国YMCA

御即位30年記念

「両陛下と文化交流―日本美を伝える―」

東京国立博物館で特別展

3月5日から東京都台東区の東京国立博物館で、特別展 御即位30年記念「両陛下と文化交流―日本美を伝える―」が開催されている。同展は宮内庁が所管する皇室ゆかりの作品の中から、天皇陛下御即位の儀式に際して東山魁夷、高山辰雄が平成2年（1990）に制作した「悠紀・主基地方風俗歌屏風」や、天皇皇后両陛下が外国御訪問の際にお持ちになって紹介された作品などが展示されている。

主な作品は、①御即位に関連する作品：「悠紀・主基地方風俗歌屏風」六曲一双 平成2年（1990）宮内庁用度課所管。②「養蚕」をテーマにした作品：「養蚕天女」高村光雲作 大正13年（1924）宮内庁三の丸尚蔵館蔵。③天皇皇后両陛下の外国御訪問時に紹介された作品：「小栗判官絵巻」岩佐又兵衛筆15巻のうち2巻（10巻・15巻）江戸時代・17世紀、宮内庁三の丸尚蔵館蔵。④天皇皇后両陛下の外国御訪問時に紹介された作品：「花鳥十二ヶ月図」酒井抱一筆12幅 江戸時代・文政6年（1823）宮内庁三の丸尚蔵館蔵。⑤フランスで開催された御養蚕についての展覧会で紹介された御蚕：近代初期に日本の蚕と繭を通して深い関係を築いたフランスにおいて、皇后陛下の御養蚕、そして日本の絹文化について紹介する展覧会が企画され、平成26年（2014）2月にパリ市で開催された。この折に展示された、天皇陛下御幼少時の御服や皇后陛下のイヴニングドレスなどが展示される。

会期：3月5日（火）～4月29日（月・祝）※3月25日（月）、4月29日（月・祝）を除く月曜休館／会場：東京国立博物館 本館特別4・5室／主催：東京国立博物館、宮内庁、文化庁、読売新聞社／開館時間：午前9時30分～午後5時 ※金・土曜日は午後9時まで※入館は閉館の30分前まで

養蚕天女 高村光雲作 大正13年（1924）宮内庁三の丸尚蔵館蔵（展示期間：3月5日～31日）

読者プレゼント

抽選で5組10名様を招待

はがきに、郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記の上、次の宛先に3月20日（当日の消印有効）までにお送り下さい。抽選で5組10名様に特別展・御即位30年記念「両陛下と文化交流―日本美を伝える―」の招待券をプレゼント。当選者の発表は招待券の発送をもって代えさせていただきます。

宛先：〒160―0022東京都新宿区新宿5―13―2 4F 宗教新聞社「読者プレゼント」係